

でんでら通信 第百四十九号 平成二十年五月

坐禅会

今月は、五月三十日（水）午前十時より坐禅会を行います。みなさんのご参加をお待ちしております。

昔の葬儀

最近、火葬場の近くの斎場で通夜、葬儀を行うことが多くなりました。当寺の地区はほとんどいっていいでしょう。そしてその斎場では、葬儀業者の取り仕切りによって淡々と進んでいきます。

私が幼い頃は、人が亡くなると喪主のお家では、親戚の中に三役といわれる一族の代表の方々が名前を張り出されて葬儀の一部始終を取り仕切っていました。それこそ、親戚、知り合いへの連絡、お寺や組との打ち合わせ、組との非時（食事）の打ち合わせ等々、今では想像のつかないようなバタバタとした雰囲気でした。自宅の襖を全部外し、座敷に祭壇を作り、枕経、通夜を済ませ、参られた方に接待し、葬儀当日は告別式のあと、大八車に棺桶を乗せ、親族一同、列を成して地区のさんまいまで歩いていきました。お寺側も書き物を用意するなど、今よりも準備物が多くあり、鈴、鼓、鉢（チン、ポン、ジャラン）の三役が必ず出頭していました。

さんまいでは、供養塔の周りを三周してから、所定の位置に棺桶を置き葬儀が始まります。さんまいは、屋根があっても壁のないような造りでしたので、風の強い日や雨の日は大変でした。蝋燭の火が風で

消えてしまい、飾り物が倒れることもありました。

当寺の葬儀は禅宗独特の引導法語を唱えるので長く、悪天候の時などは、参列者は時間が長く感じたことでしょうか。その後さんまいの一角にある炉に棺を納めて組の方々に焼かれました。どんな人でも最後は組の人に世話にならないといけない、というので組の付き合いは大切でした。

葬儀は弔いという宗教性が色濃く感じられ、みんなで送るといふ人々の儀式でした。

しかし最近、亡くなると病院から業者によって手配された車でお家に入られ、お寺からお家に伺う頃には、綺麗に寝かされていることがほとんどです。枕経を終え、葬儀の段取りを打ち合わせすると早々に、まずは火葬場を押さえることが優先されます。そして、葬儀会場となる斎場の手配、この都合で通夜、葬儀の時間が決められます。

「お寺さん、この時間でいかがでしょうか」と問われ、「はい、わかりました」となります。それから、遺影の写真やら、祭壇のセット（だいたい三種類ほどの中から選びます）、通夜の会葬お礼の品や料理、葬儀の非時の料理、初七日後の料理等々を決めていきます。核家族化により、親戚は相談にはのつても決定権は、喪主家族の一存で決めていきます。

葬儀が終わる、いよいよ火葬となっても火葬場業者が棺を台車に乗せて炉前に運び入れ、親族はついていくだけです。灰葬（火葬直前のお参り）の儀式を業者の指示に従い淡々と焼香し、喪主がスイッチボタンを押して終わりです。

そこには、指示に従えば一つの流れに喪主一同が乗

っていけば完了、という道筋ができあがっています。時代といえばそれまでですが、昔の葬儀は人の死をみんな協力して見送る身近なものでした。さんまいや焼き場は、子供の夏の肝試しの場所で、どこか怖い場所であり、子供心に人は死んでどうなるのだろうか、おぼけやら幽霊やらになるのか、とドキドキしたものです。しかし今は、そういったものが全く見えない世になつてしまいました。

子供の頃、朝の通学中、近くの川の木の枝に鶏が羽根を取られて吊り下がっていました。気持ち悪いと感じました。むごいと思いました。家に人が集まるから、かしわ飯（味噌飯）で馳走するためと教えられました。吊り下げられた鶏は、血を抜くためであり、落ちた血は川に流れていくのだ、と後から知りました。日々の生活の中で、生きていく動物の命をいただくということが分かったものです。

今、牛も豚も毎日数万頭が屠殺（とさつ）され綺麗に解体されて食卓に届きます。殺生するな、食べるなと言っているではありません。牛も豚も鶏も命があつて動いていました。人間の都合で犠牲になつてくれたのです。現実を想像せずにきれいなところだけで済ませると想像力が欠如します。スーパーのトレーに並べられている牛肉や豚肉も元をただせば牛や豚です。人の口に入る動物を、産業動物とか経済動物といいますが、人間のために育てられる動物です。これらの動物にも命があつたのです。流通が発達し、いわゆる畜産によつて商品化され、本来の命の尊さが分からなくなつていきます。子や孫が死を迎えた人に粗暴な言葉をかけるような時代にはなつて欲しくないものです。